

四たび會議は開かれて  
伊都之尾羽張神 もしは  
その神の子建御雷之男神をよきと  
決議されたり

尾羽張の神はされど

天の安の河の 河上に在し

天の安の河の 河水せきて 道をふさげば

世の常のかみ此の神に近よるを得ず

天迦久神擇ばれて

此の神に命つたふ

建御雷之男神

天迦久神

天尾羽張神に大詔つたへければ

かしこし 仕へまつらん

あが子建御雷之男神を貢進らんと

天尾羽張神 恭々しく受け

天鳥船神をその従者とす

伊那佐の小濱に降りたる 二神は



固き決心と強き態度を持し  
十掬の劍を抜きて 波打際に逆にさし  
その前に踏みて宣る

天の下知らず

天照大御神の詔なり

汝 大國主神は

廣大なる土を地領有けれども

もともと 汝の私すべきにあらず

そはたゞ 天の下知らず大主のものにして

天の下知らず天照大御神は

この國知らせと 御子に言よさせ給ふ

汝 これを

御子に奉還るや

天地は御神のものなれば

領有くことは 神ながらの道ならぬを

大國主神は さとりたれど

久しき間 領有ける土地なれば

奉還の決意 直につかず

事代主神 答ふべしと曰ふ

事代主神は此のとき 美保の前に在りて

鳥を狩り 漁りして 遊び居れり

天鳥船神 美保の前に行きて

事代主神を召して來れり



汝いまし 如何に思ふやと

大國主神 問へば

われ等領有うしはくべきにあらず

天の神に獻たまるべし

事代主神はかく答へて

乗りて來れるもとの船に入り

その船を青柴垣あはしがきとし

舟の邊踏へりふんでかくれませり

建御雷男神 大國主神に問ふ

事代主神かく曰へり

なほはかるべき御子在りや

大國主神答へて曰ふ

わが子 建御名方神ぞそれなる

これを除はきて他に在らず

かく云へるとき 建御名方神

輕々と 千引岩ちびきのいはを手末たなすまに提け來て 曰ふ

或が國に來て

忍び忍び物言ふは誰ぞ

建御雷之男神 仔細を語れば

建御名方神は曰ふ

さらば われ等力競べせん

汝いましもし勝たば



なかつくには天神の御子に獻けん  
我もし勝たば  
なかつくにはとこしへに我がものなり

建御名方神は  
優れたる自らの力に恃めり  
されど建御雷之男神にもまた たのみあり  
靈異なる御神の靈ぞ そのたのみなる

御手を出し給へ  
われ先づ試ん

建御名方神は斯く云ひて  
建御雷之男神の御手をとれば

建御雷之男神の手は  
逆立ちて立てる 氷のごとくなり  
觸るれば切るる劔刃のごとくなり  
施すべき術もなし  
建御名方神 畏み恐れて引きさがりたり  
建御雷之男神おもむろに進み  
さらばわれ試ん と  
建御名方神の手をとれば  
建御名方神の手は 若葦のごとくしなへり  
御雷之男神 その手をつかみひしぎて  
建御名方神を投げとばす



根こそぎ 自惚を打ちひしがれたる  
 建御名方神は 一目散に逃げ出す  
 建御雷之男神その後を追ひ  
 國を越えて科野に入り  
 洲羽の湖のほとりに追ひつむ  
 追ひつめて建御雷之男神  
 建御名方神を打殺さんとすれば  
 建御名方神は地にひれ伏し  
 助命を請ひて誓ひたり

願はくは  
 我をな殺しそ  
 我ははや この地に朽ちん

この地をおきて  
 他處には行かじ  
 わが父 大國主神の命に違はじ  
 わが兄 事代主神の命に違はじ  
 天つ神の御子の命のまにまに  
 葦原の中國を獻らむ

顯界と幽界

建御雷之男神 大國主神の御下に還り來て曰ふ  
 事代主神 建御名方神



御子の命のまにまに  
なかつくにをたてまつらんと曰す  
さらば汝は如何に

大國主神答へて曰さく

わが子ども二柱の神の白せるまゝに  
われもまた違はじ  
なかつくには 命のまに／＼ 悉く獻らむ  
たゞ一つわが願ひあり  
わが住所をば  
御子の 天津日嗣知ろさむところとなし  
齋庭の稻穂 食ろしめさむところとなし  
富足る御簀のごと

庭津石根に宮柱太しり

高天ヶ原に冰木高しりて  
わがみたまを祭り給へ

吾は 八十隅路遙けき 黄泉の國に隠りて  
顯なることにかくりて  
目に見えぬ幽事によりて  
皇孫に仕へまつらん  
多なるわが百八十神の前後には  
隠りませし八重事代主神仕へまつらば  
反きまつる神はあらじ

かく白して大國主神  
顯國を避て黄泉の國にぞいでましぬ



大國主神の たまひしまゝに

出雲の國の多藝志の小濱に

天の御殿營みまのいとなまれたり

御殿成れば 水戸の神の孫みまのひこ

櫛八玉神は膳夫かしはとなりて

天の御饗みあきたてまつりたまふ

御饗たてまつるために

櫛八玉神 鵜となりて

海の水底に入り

底はつはじくひ出でゝ來り

天の八十平そひちひら笠かさつくりぬ

刈りとられたる海布の柄は 火燧ひきり曰いとされ

海尊かみの柄かは火燧ひきり杵きねにつくられ

かくて聖なる火は鑽きり出されけり

このとき嚴おとこなる祝詞のりと奏なさる

このわが燧かれる火は

御祖みま 神産巢日神かむむすひのかみの御恩頼みたまのたまにより

新あたらにつくられし御厨みくりやに焚たかれ

高天ヶ原にとゞくまで焚たかれ

八拳やつかん垂たるまで煤すすはたまらん

地の下は

底はつ石根いしねと化なるまでも

焚たき焚たきて焚たき固かたまらん



栲の皮の繩 千尋にながく

海人の釣れる

廣口の大鱧を

掛聲高く 引きよせ上げて

拆きたる竹の撓むまでも

天之眞魚咋 獻るなり

建御雷之男神

なかつくにを言向け和はしぬれば

その旨

高天ヶ原に復奏まをしぬ

第五篇



天孫降臨

天照大御神 みたま高御産巢日神とともに

日嗣の御子 正勝吾勝勝速日天忍穗耳命に詔りたまふ

いま葦原の中つ國は 言向け終うせたり

われ すでに いましに

この國のこと ことよさせ給へれば

汝<sup>いまし</sup>いまこそ降り<sup>くだ</sup>まして治しめせ

天忍穗耳命かしこみて曰したまはく



われ みことのまに／＼天降りせんと  
準備おさおさ怠りなかりしも

時はすでに経り

その間に靈異なる御子生れましぬ

靈異なるがゆえに その御名も

天<sup>あめ</sup>邊<sup>へ</sup>岐<sup>ぎ</sup>志<sup>し</sup>國<sup>くに</sup>邊<sup>へ</sup>岐<sup>ぎ</sup>志<sup>し</sup>天津<sup>あまつひ</sup>日<sup>ひ</sup>高<sup>たか</sup>

日子<sup>ひこ</sup>能<sup>の</sup>邇<sup>に</sup>々<sup>々</sup>藝<sup>の</sup>命<sup>のみこと</sup>ととなへらる

この御子こそ 新しき神國の

礎となる主にはまさぬか

天忍穗耳命の曰したまふまにまに

なかつくには

日子番能邇邇藝命にことよさせられにき

天照大御神 日子番能邇邇藝命に詔り給ふ

豐葦原の水穂の國は

わが御靈 受けつける汝が治らさん國なり

豐葦原水穂の國は

わが子孫の

世々に主たるべき地なり

千五百秋の水穂國こそ

神とこしへに知らず神國なり

皇孫 汝まことに

就いて治らせ

汝と 汝の國に 平安あれ

幸なるかな この門出



つぎつぎに靈は嗣がれて

その靈嗣 同じ一つの靈 生きどほしにて

天壤と共に 窮りなく隆えまますべし

御鏡を日子香能邇邇藝命に與へまして

天照大御神詔り給ふ

いまより後

現身にては會ひがたし

されどこゝに わが靈あり

わが御前を拜くがごと

嚴みてこの靈を齋きまつれ

齋きまつるそのまことこそ まさに我なり

われは生きどほしの神なり

天地とともに我は在るなり

草薙劔と八咫の勾璫も授けらる

劔は大御神の雄々しきみたま

如何なる福もはらふべし

滑にして つやつやしく光る勾璫は

慈愛あふるゝ大御神のみたま

國民の平安きを思ほさるゝ

大御親のやさしき御心なり

御鏡も劔も玉も

天照大御神の大御靈なり



御たまの御前のことを執り行ふために  
思金神 手力男神 天石門別神の  
御靈實もまた副へて遣はさる

日子番能邇邇藝命と共に天降りませるは

天照大御神の御靈實のみにはあらず

それ／＼のつとめ持つ 五件の族も ともなり

五件を統ぶる五件緒は

天兒屋命 布刀玉命 天宇受賣命

伊斯許理度賣命 王祖命

天兒屋命は

現神と天照大御神との御中に立ちて

宜しきさまに執持つ 職の祖

布刀玉命は

潔齋して 神具つくる諸氏の首

天宇受賣命は

猿女君の遠祖

伊斯許理度賣命は

鏡つくり部の祖

玉祖命は玉つくり部の祖

天兒屋命と布刀玉命とには

ことのほか大なるつとめ 負はせられたり

高御産巢日神

この二柱神に詔りたまふ



高天ヶ原に在りては われ  
 神を祭るわれ等の法に従ひ  
 天津神籬 天津磐境を起し樹て、  
 皇孫のために齋ひまつらん  
 汝 天兒屋命 布刀玉命は  
 天津神籬を持ちて  
 葦原の中つ國に降り  
 皇孫のために齋ひまつれ  
 皇孫のため神を祭るは  
 中つ國のまことなるのみならず  
 高天ヶ原の神もまた  
 皇孫のために神を祭りて

すめらみことを扶翼すなり  
 神と皇 一つなれば  
 たがひに拜み拜まれて  
 神國こゝにとこしへに  
 盤石の基さだまれり

日子番能邇邇藝命 天降りまさんとするとき  
 八方に 道わかれ居るところに  
 一人の神あり  
 鼻はたかく背はながく  
 眼は燦々と ひかる  
 従の八十萬神みな  
 まぶしみて 誰なるを問ふを得ず



天照大御神 高御産巢日神

天宇受賣神に詔り給ふ

汝は たをやめなれど男夫のごと

射向ふ神にも目勝神なり

行きて問へ

何のためにそこに立てるやを

また誰なるや を

天宇受賣神はつかつかと

その神の前に進みて云へり

皇孫の天降りまさむ道を塞けるごとく

八衢に立つは誰ぞ

いかしき神は答へぬ

われは國つ神 猿田毘古大神なり

わがこゝに立つは

天の神の御子 天降りますとき

み前に仕へまつらんとて

出で迎へたるのみ

天宇受賣神 かさねて曰ふ

天の神の御子は何處に降らるゝや

猿田彦神答へけり

天の神の御子は

筑紫の日向の高千穂の峯に到りますべし



天宇受賣神 還りて かへりごと曰す

天津日子番能邇邇命は、

天の石位を離れたまひぬ

あゝ 高天ヶ原！ 高天ヶ原！

遠く 高く

尊く きよく

みちたらへる國 高天ヶ原！

とこしへに神在し！

とこしへに皇祖神の靈在し！

父の君 天忍穗耳の在す國！

親しき はらからの在す國！

されど いま天降りまさんとする

なかつくにもまたまなるかな！

こゝは 今天地の眞中とならんとし

その眞中の主はいま 天降りまさんとし

その主 世々の日の御子を通して とこしへに生き

御稜威いや榮にして

御うつしびは 草木鳥けものに及ぶ

おほむたからは日の御子にまつろひ

日の御子の大きこゝろは

もれなくおほむたからを掩ふべし



大御心はやがて いやはての世界にまで及びて  
よろづの國 みな ところを得べし

天津日子番能邇邇藝命はいま

その初代の神たり

あゝ おほらかなる此の日よ！

あゝ おごそかなる此の日よ！

のぞみ 充てる日のはじめ！

まことを世界に敷かん 日のはじめ！

おほむたからに 正義を知らず日のはじめ！

人類が慈悲と恩愛を味ふ 日のはじめ！

天忍日命 天津久米命

天の石鞆を負ひ \* 1

頭椎の大刀を佩き \* 2

天の波士弓を取り持ち \* 3

天の眞鹿兒矢を手ばさみ \* 4

部下の武士引き具してお前に立つ

高天ヶ原に別れを告ぐれば

天の八重棚雲 押しわけられ

御稜威の通ふ 聖なる大道は

道別きに道別けられて

颯爽と天の浮橋わたり

筑紫の日向の高千穂の

靈異の峰に 天降りたまふ



かりの宮はこゝに築かれ  
 しばしはこゝに止まられしが  
 やがてまたこゝを出で立ち  
 空國あらくにの 不毛の土地を通りすぎ  
 笠沙かささの 前まへに着き給ふ  
 こゝは朝日の 直射たざらすくに  
 夕日さえぎるものもなし  
 高天ヶ原にも似通へる この地はよしと  
 天津日子邇邇藝命は  
 底津石根に宮柱太しり  
 高天ヶ原に冰椽ひぎ高しりて  
 御殿みどのつくらせ給ふ

同 化

天の神の御子 降りますとき  
 國神くにつみかみのやからは おそれちどかひ  
 隠れ場 覓もとめてひそみたり  
 御子のやからは されど  
 時ふるも 荒ぶる仕業 何一つせず  
 神をまつり 稻をつくり  
 なごやかなる日々を送る



稻つくる業について

高天ヶ原に云ひ傳へあり

ある日

天照大御神 月夜見神に詔り給ふ

葦原中國に保食神あり

汝 月夜見神 就きてみませ

月夜見神 なかつくにに降りまし

保食神の許に 到りたまふ

保食神 首をめぐらして國に向へば

口より飯 出づ

保食神 首をめぐらして海に向へば

鱧の廣もの鱧の狭もの 口より出づ

保食神 首をめぐらして山に向へば

毛の鹿もの 毛の柔もの 口より出づ

これ等のくさくさのもの 悉くそろへて

百机に貯へてたてまつる

月夜見尊よろこばさず

忿然 色をなして保食神に曰へり

穢はしきかも

いやしきかも

口より吐れる物をもて

われを饗せんとは



月夜見神は劔をぬき  
保食神を撃殺したまひぬ

天照大御神

月夜見尊の後奏 かへりこ ききたまひ

大御ころろにかなはず

汝は悪しき神なり

ふたゝび相見じと

詔らせ給ふ

天照大御神はまた

天熊大人を遣はし給ふ

天熊大人 なかつくにに到りて見れば

みまかたりたる保食神の頂きに

牛馬 生り

ひたひの上に 粟生り

眉の上に 蚕生り

眼の中に 稗生り

腹の中に 稻生り

陰のうちに 麥、大豆、小豆生れり

天熊大人ことごとく持ち還りて

天照大御神に奉りたまへば

天照大御神喜ばし給ひて

うつしき蒼人草の



よき食糧なるぞこは

と詔はる

天照大御神はかくて

粟、稗、麥、豆を陸田種子となし

稻をもつて水田種子となし

天邑君につくらせ給ふ

天の狭田あり長田あり

その秋八握垂る稻穂みのり

蚕また糸を吐けり

高天ヶ原の農業はかくてはじまる

天照大御神は米を尊び

蒼人草の食ひて生くべき米を尊び

宇迦之御魂の御名をたまへり

皇孫の天降りますとき

吾が高天ヶ原に御す

齋庭の稻穂を

わが御子に御せまつると

宇迦之御魂をつけさせられ

おごそかなるみさとしあり



木花佐久夜毘賣

天津日高日子番能邇邇藝命

笠沙の御前に出でまし給へば

顔美かほよき美人せとら 海邊うみべをさまよひてあり

呼びとめてその名をとへば

神阿多津比賣かみあかつひめまたの名は

木花佐久夜毘賣と答ふ \* 5

天津日子番能邇邇藝命 この美人せとらを愛でて詔ふ

われ汝きこはむに目合せむ

美人はこれを拒まざれど

たゞ 父のゆるし得られよと 答ふ

汝が父は誰ぞ と

問へば

大山津見神！ と

美女は答ふ

國神 大山津見神！

天之邇邇藝命は喜ばし給ひぬ

國神を打ち滅ぼすは御心ならず

國神を追ひはらふことも

國くにの生業なまはひを奪ふことも また



神國の主の みこころならず  
愛をもて一つにすることこそ 神の御わざ  
そのわざを行ふときはいま  
與へらねたり

父の神の許し得て來よ と

邇邇藝命のたまへば

木花佐久夜毘賣は 父の許にぞ去りにける

大山津見神は甚く喜び

百取の机代フキしろのもの 持たしめて

木花佐久夜毘賣をたてまつりけり

後に木花佐久夜毘賣あき來て 白したまはく

妾はみこもれり

天神の御子をひそかに

生みまつるべきにあらねば

そのむね白すために 來れり

天之邇邇命のよろこび 一方ならず

されど邇邇藝命は思ひたまへり

國神たち これを信せずば如何に？

天之邇邇藝命はかくて その證あかしをもとめたり

その證を得んために

天之邇邇藝命はのたまへり



たとひ天神といへども

一夜にしてよくはらませ得んや

そは我子にあらじ

國神の子にこそあらめ

そのみこゝろ知らで

木花佐久夜毘賣は悲しめり

わがみこもれる子

もし國神の子ならば

幸 われにあらじ

もし天神の御子ならば

幸 われに在るべし

佐久夜毘賣はやがて八尋の殿をつくり

殿のうちに入りまし

殿を土にて塗りふさぎ

もし國神の子ならば 焼けうせむ

もし天神の御子ならば われとわが御子

すこやかなれ と

木花佐久夜毘賣は

天神 地祇に誓ひて

その殿に火を放ちたり

御子は天神のものなりき

眞盛りに燃ゆる火のうちに

火照命 火須勢理命 火遠理命

三柱の御子生れ給ふ



火遠理命はまた

天津日高日子穗穗出見命と稱へらる

海幸山幸

こゝにまた物語あり

火照命は海に幸取る 海佐知にして

火遠理命は山に幸取る 山佐知なり

火遠理命 火照命に はかりて曰う

幸をかへて取らんは如何に

火照命 きゝたまはず

三度乞はして わづかにうなづく

火遠理命 兄の命の

海佐知の具もて海に出でましゝも

さか魚一尾も得給はず

あまつさへ

兄命の鉤をさへ失ひ給ふ

そのとき 火照命曰ひたまはく

山幸は汝が幸

海幸はわが幸

それ〴〵に 授かれるものなれば



かたみに返して 己が幸取らん

當惑し給へる火遠理命は

みことばはいかにももつともなれど

われは、汝が鉤を失へりと

火遠理命 謝し給へども

火照命うけがはず

鉤なくては海の幸なきに同じ と怒りまふ

火遠理命 御佩の十拳劔を折りて

五百鉤つくりて 償ひたまへども

火照命 受取らず

千鉤つくりて 償ひたまへども

なほも受けず

ひたすらに

もとの鉤かへせと徴らせ給ふ

詮方つきて 火遠理命は海邊に出で

懊惱の御身をさすらひ居れば

鹽土翁來りて その由をきよ

編み目しまれる籠船をつくり

命をこの船に乗せて

波の上に押しやり給ふ

鹽土翁の云ふ

やゝしばし往てまさは



波のうまし路あるべし  
 その波路を 往でまし給はば  
 魚鱗の屋根ある 宮に着かせ給はん  
 そはわたつみの神の宮なり  
 その海神の 御門に到りましなば  
 御門の側に井戸あり  
 井戸の上に 湯津香木の枝 延びおれば  
 その枝の上に休ませ給へ  
 海神の女 汝が命を見出で  
 汝が命のために譲り申さん

鹽土翁の云ひしごとく

美はしき海神の魚鱗の宮あり

井戸あり 枝繁き湯津香木あり  
 火遠理命 香木の上のぼり居れば  
 海神の女 豊玉姫の従婢 出で来る

手に玉器持てるは 水酌まむためなるべし  
 従婢 水を酌まんとて 井の中を見れば  
 井の水 燦然としてひかり居れり  
 思はず頭をあけて 仰ぎ見れば  
 香木の木に 麗はしき壯夫あり  
 麗はしき壯夫 水を乞ひ給へば  
 従婢 水を酌みて玉器に入れ  
 恭々しくたてまつる



火遠理命 水をば飲まで  
首の御珠解して口に含み  
玉器の中に吹き入れ給ふ

この珠玉器の底に膠着きて離れねば  
そのまゝ従婢 豊玉毘賣に進る

豊玉姫 婢に問はせ給ふ

門外に人ありや

従婢事の次第を語りけり

豊玉毘賣命 出で、見給ひ

麗はしき壯夫を見て 胸はおどりぬ

毘賣 火遠 理命を導きて 内に入れば

海神はまことにこれ 天つ神の御子ぞ と云ひて

海鱸の皮の褥 繩の褥 八重に敷き

百取の机代の物を具へて 御饗して

豊玉毘賣を婚せまつりぬ

火遠理命 海神の宮居にて

三年の間 いとも楽しく住まはせ給へども

中國のこと また忘れがたく

望郷の念もだしがたし

豊玉毘賣命 これを愁へて

このよし 父の神に告げぬれば

海神 火遠理命に そのわけをきく



火遠理命 まつぶさに仔細をかたれば

海神 火遠理命に深き同情をよせ

鱧の廣物 鱧の狭物を ことごとく召し集め

その鉤 取れる魚やあると たづぬ

物を得食はぬ鯛あり

喉に刺さるものありと云ふに

その喉さぐりて見れば

喉に鉤あり

取り出で、水にすゝぎ

火遠理命にたてまつる

わたつみの大神 火遠理命に誨へまつりぬ

淤煩鉤 須々鉤 貧鉤 宇流鉤と云ひて

\*6

この鉤を 兄の命に後手にたまへ

兄の命 高田をつくらば

汝が命は下田を營り給へ

兄の命 下田をつくらば

汝が命は高田を營り給へ

吾は 水のことを司れば

兄の命より 水の幸うばひ

汝が命に 水の幸與へまさん

わたつみの大神 また

鹽盈球と鹽乾球を 火遠理命にさゝけまつりて



兄の命もし 汝が命を攻めなば  
 鹽盈球を出して 溺らせたまへ  
 兄の命もし その過ちをさとり給はば  
 鹽乾珠を出して 潮をひかせ給へ  
 かくしてたしなめ給はば  
 兄弟の命 あにちと ともに幸あらん

かくて綿津見大神 一尋鰐に仰せて  
 火遠理命をなかつくにに送らせ給ふ  
 なかつくにに歸らせし火遠理命は  
 海神の教へしまゝに  
 兄の命を宥め給へば

兄の命もいまは  
 こゝろやさしき御神となりて  
 かたみに楽しく 清く 住まはせらる  
 ほどもなく豊玉毘賣は  
 火遠理命をたづね來まして 曰ふ  
 御子産むべき時は來ぬ  
 天神の御子を海原に生むは  
 恐れおほければ たづね來ぬ  
 海濱の波打際に  
 鵜の羽を葺草にせる 産殿はつくらる  
 その産殿いまだ成らざるに



豊玉毘賣命 はやくも産氣つき  
 まだ葺き合へぬ産殿の中に入りたまふ  
 豊玉毘賣 火遠理命に白さく  
 國民の族はおのおの  
 そのならはしを異にすれば  
 わが 子うむときには  
 妾をな見たまひそ

このことばにより 火遠理命の  
 好奇心と喜びとは  
 なかくくに刺戟されたり  
 毘賣が 子産みのまさかりに  
 みこと これを垣間見させれば

豊玉毘賣命は八尋鰐となりて  
 腹ばひ ころび 若しみ居りぬ

火遠理命 驚きおそれて  
 思はず御目をそらされたるも  
 豊玉毘賣命 いちはやくこれをさとり  
 御子産みおとしたるとき  
 綿津見の國に還りましぬ  
 そのとき

豊玉毘賣の白さく  
 御子みそなはさんために  
 吾は 海道越えて  
 ときくくに來りはべらんとせしも



あが君

わが姿を垣間見させれば

はづかしきことかぎりなし

命みづから養したまへ

御子はされど

心やさしき をみなのかしづきにより

すこやかに育てられ

天津日高日子波限建鷦草葺不合命とぞ號されける

豊玉毘賣命は御子戀しさのあまり

程もなく いろと玉依毘賣にことづけて

火遠理命にみうた獻りけり

赤玉は緒さへ光りて美はしけれど

それにも増して

白玉の君の御すがた

貴くもありけり

火遠理命もまた み歌にて答へませり

奥つ鳥 鴨着く島に

わが率寝し

妹は忘れじ

世のことごとに

火遠理命 またの御名は日子穗々出見命は



高千穂宮にまします

一三四

天津日高日子波限建鷦葺草葺不合命は

姨あひば 玉依毘賣命たまよひめに娶めとひて

五瀬命 稻冰命 御毛沼命

若御毛沼命

またの御名は神倭伊波禮毘古命かむやまといはれひこを生ませ給ふ

神倭伊波禮毘古命こそ

大和の樞原に鎮ります

いやさきのすめらみこと

神武天皇にます

註1 石いは鞆ゆき 鞆は 矢を入れるもの、石は堅いもの。  
註2 頭椎かぶつち之大刀 くぶはかぶりふる、なぞのかぶの轉で、頭のことである。書記には筒輔豆智かぶつちとある。劍の頭が槌のやうになつてゐるものらしい。

註3 波士弓 はじにて造れる弓。櫃の字を書くのが普通である。

註4 眞鹿兒矢 かごにてつくつた矢。しかしかごは果して何であつたかはつきりわからぬ。まは眞で別に意味はない。かごは鹿兒であらうとも曰はれる。即ち鹿の角を鎌とした矢の意か。本居宣長は鹿を射る矢だと云つて居る。

註5 木花咲耶姫の傳説はいと美はし。これは、古代日本の婚姻形體を示すものであると共に、日本婦人の貞操を物語つてゐる。火を放つてその貞操を證せんとした木花咲耶姫は特筆さるべき日本婦人である。

一三五



第六篇

註6 游須鉤は憂鬱を釣る鉤。  
須須鉤はすさみを釣る鉤。  
貧鉤は貧を釣る鉤。  
宇流鉤はうるけを釣る鉤。  
すべて呪咀の言葉である。



神武天皇

高千穂宮

西には霧島の峻峰 おほぞしに聳え  
山裾には なたらかなる平原のび  
その盡くるところは 日向灘の紺碧  
わたつみは 天につらなり  
天と地とは こゝに融け合ふ  
こゝは天にあらず地にあらず  
こゝは天にして地なり



こゝに鶴草葺不合命は

大海の神の女 玉依姫によりて

四柱の神を生みたまふ

五瀬命 稻冰命 御毛沼命 若御毛沼命

若御毛沼命は またの名を豊御毛沼命 ともとなへられ

神倭伊波禮毘古命 とも唱へらる

あるひはまた 狭野に生まれししがゆえに 狭野命ともとなへらる

狭野命の生まれましゝとき

玉依姫の苦しみは いとぞ多かりき

玉依姫は 産場石に凭りかゝりて

あらんかぎりの御力をもて苦しまれたり

されど その生まれしまゝ御子は 見よ

あらがねのごとくつよく 赤く

御聲は 岩をもつんざくばかりなり

父みことの御よろこびは 此上なく

げにこの御子こそは 水穗の國の主

地上の天つ國の 礎とこそは 宣はれたり

御子たちは

天と地との隔てなき聖地にて

清朗なる陽の光りをうけ

靈と清氣とに覆はれつゝ

いとも健に生ひ立ちぬ

御子たちのために營まれたる



廣き靜なるみあらかは  
皇祖の恩愛の翼なりき

狭野命 今や 御年十五なり  
鶉菴草葺不合命はこのとき  
狭野命を日嗣の主とさる

朝日の昇ること みことはすくくと 生ひ立ち  
身も靈も 天地の御神のいのちに充ち  
吾田の小橋の君の妹  
吾平津媛を妃となし給ひ  
手研耳命を生みませり

日向の海邊 波白きあたり  
はてしなき大海原に面して  
雄渾なる大自然の懐に抱かれつゝ  
日嗣の御子は生ひましぬ



御東遷の會議

日嗣の御子 御歳四十五のとき

皇祖の靈は みことの御心を揺り動かされたり

長き年月 みことの御胸に收められたる

神國恢弘の御志ぞ おどり出でにま

水清き大淀川の 海に注ぎ入るほとりにて

四柱の御子たちと群臣らの

嚴なる會議ひらかる

日嗣の御子は詔はれたり

むかしわが天つ神 高皇產巢日尊たかみむすひの尊ならびに大日靈尊おほひらめのみこと

この豊葦原瑞穂の國を神國として

わが天祖瓊瓊杵のみことに 授け給ひしかば

瓊瓊杵尊は天關あまのいはくらを打ちひらき

八重路の雲を押しひらき

八重路の浪を乗り超え

瑞穂の國の西偏あまに天降り給ひき

爾來幾とせを經にけん

皇祖皇考の御徳みちづくしめは 民あまにうるほひ

神の國の基は奠められたり

されど 御稜威はなほ 遠隔の地にまで及ばず



邑には君あり 村には長ありて  
 猥りに領域を争ふ  
 斯くてはまことに 民も安きを得ざるべし  
 聞くならくその地は青山に圍まれ  
 畑つもの田なつものゝ 豊熟する 美しき地なり  
 まさにこれ 天業を恢弘すべき六合の中心なり  
 朕またきく その地には既に  
 高天ヶ原より天降り來れる者ありと  
 恐らく彼は饒速日命ならん  
 饒速日命の榮ゆるはよし  
 されどかくては  
 神國の恢弘を委ねられたる わが使命を如何に  
 こゝは邊僻の地なり

天の下しろしめす都には適はず  
 速に彼處にわたりて都を奠めん

御子たちは

日嗣の御子の 聖なる御心に打たれたり

日嗣の御子の御心は 御子たちの御心なり

まこと然なり

われ等、都を東に遷さん

御子たちは斯く答へませり

皇居の丘には今や  
 聖なる理想の太陽 昇りたり  
 やがて大八洲を照すべき



ひろく 八紘あつしやに光被あすべき

神かみの御徳みつくしみは 赫々あざあざと輝あきはじめたり

皇居みやうきよの丘かみには活氣いきみなぎり

大淀川おほふぢのほとりには舟艇ふねあつまり

御子みこたちの御胸みむねには聖火せいふ燃え

弓弦ゆみづなのごと 群臣ぐんしんの腕うでは鳴りぬ

御 發 向

甲寅かのえとらかんたづき十月の二十七日

晩秋ばんしゆの空高く

陽光ひかりも暖ぬくかき晴朗せいりやうなる日

日嗣ひつぎの御みしるしなる三種さんしゆの神器かんぎを先頭せんとうに

聖せいなる一行いっけいを載のせたる舟艇ふねは

聖せいなる理想りしやうを懐いだきて

大淀川おほふぢの河口がわを離はなれぬ



舟艇は岸邊に沿うて 北に進みぬ  
風は凩き 波は静なり  
げに 空も海も 神の門出を祝ふに似たり  
されど舟は小さく ふなあし遅ければ  
沿岸の津々浦々に舟泊りし給ふ

美々津の浦に宿られしとき  
浦人は心からなるまごゝろをもて  
日嗣の御子を迎へまつり  
豆を搗きまぜたる搗入餅をさゝげたれば  
日嗣の御子は歡び給ひ  
ねんごろに浦人を 勞はり給ふ

されば浦人はいたく感激して  
翌る日 早朝の御進發ときには  
起きよ、起きよ と呼はりて  
家毎戸毎を叩き起こし  
こぞりて美々津の濱に見送りまつり  
御稜威の輝きまさんことを  
ことほぎ申せば  
有りがたう浦人よ  
汝れの日幸多かれ と  
日嗣の御子はのたまひ給ふ  
美々津の浦をこぎ出でて  
海邊を 北東へと進める御船は



浦人のまごころを 胸内むねうちふかく 抱いだきしめたる

よろこびの神人をもて 満みされたり

天あまの神はされど

そのゆるめる心を警おそむることく

冷たき風を吹き送り

高き浪 白き波をば起したまへり

船は覆らんとす

いざ岸につけん と

神々は語り合ひ

みことの裁断を待てり

泰然と 舟べりに立たし給へる みことの君は

朕わがにもし過あらば 朕を罪せよと

御銚をとりて海の中に投げ込み給ふ  
みことの生命なる 御銚をとりて

みことのまことは 天に通じ

海は静まり 波はおさまり

空は晴れ 陽は輝き

はやての如く 舟はすゝめり

五箇瀬川の水流は 日光ひかりをうけてきら／＼と輝きらき

銀しろがねの帯の如く 迂まがねれるあたり

舟はゆるやかに 北に進みぬ

宇土崎の波も静けく



岸崎 超ゆれば

日は西山にかくれたり

人なき里の 細野ぞ今宵の 假寝なる

波静なる 佐伯灣に 一つの孤島あり

砂は白く みどりは深し

これ御神の御鬘ぞ その御鬘うげんと

みことは のらせ給ひぬ

打ち寄する波に洗はるゝ 砂は清し

この砂濱を堀りて 清水を得よと

みことの命に砂を堀れば

滾々として清水わき出づ

この水は鹹水ならず 眞水なり

げにこれは 神の井戸なり 御稜威かしこし

神々は驚き合ひて

榮えを みことに歸したまふ

伊豫の佐田の岬と

豊後の海部半島と

二つの腕の 伸べられたるところは

速吸の門なり

御舟 この門にさしかゝりしとき

小舟の上に釣する 漁人ありしが



釣道具を舟におさめ

御舟の側に近寄り来れり

漁人は色白く 眼まなこきよらに

聰明と誠實まこととを 眉宇まゆぶにあらはせり

端然と舟ばたに立ちて

彼はかみづいとねんごろに頭を垂れぬ

汝いましは誰ぞ

いつくしみ深き 御ことばは かゝれり

吾はこの浦に住む

珍彦ちひひこと稱ふるものなり

天つ神の御子 この關門にさしかゝられたりと きゝ

こゝにお迎へ申すなり

漁人は答へぬ

みことと漁人との問答は はじまれたり

汝このあたりの船路を知るや

知れり

わがために水先案内するや

わが願ひなり

珍彦をわが船にうつせと

みこと 命じ給へば

日鷲のみことは 舟棹を珍彦に差しわたしぬ

珍彦その棹を手にとれば



雙方の船は近寄り

船腹と船腹と びたりと相ふれ

珍彦は己が小舟を捨て、御船に移りぬ

珍彦は己れを捨て、

天つ神の御懐みまごころに入りしなり

一切すべてをすて、天つ神にまつろひしなり

みことは甚く喜ばれ

珍彦の忠誠を愛でられ

椎根津彦の御名を賜ひぬ

椎根津彦は みことのために 水先案内しるべとなりぬ

椎根津彦のしるべにて

舟脚は頓に速まり

別府灣は横よこぎられ

國東半島くにとうはんとうも瞬時しゅんじに超え

御船ははや驛館川やくかんがわの川口に着く



足一騰宮

こゝは筑紫の國菟狹なり  
こゝに國つ神菟狹津彦と  
その妹 菟狹津姫ありて  
みことの一行を 歡び迎へぬ

あゝ遂に來ませり  
天つ神の御子 來ませり  
われ等如何にながく

御子の來臨を待ちのぞみける  
願はくはこゝに心おきなく  
玉體を慰はせ給へ  
水清き驛館川のほとり  
緑こき岸邊に對つて  
足一騰宮は 造營まれたり

眼下の清流には川魚群れ  
岸邊の森には小鳥さへずり  
閑寂のうちに神るませり  
菟狹津彦 菟狹津姫の  
まごゝろこめたる大御饗は  
この行宮にて献げられたり



大古より筑紫の國は

菟狹津彦 申し上ぐ

常世の國と往來して

民は繁く 國は富みけり

たゞ一つ足らぬことは

この國に神のみまさぬことなり

天つ神の御子をこゝに 迎ふることは

民とわれ等 ひとしく歡ぶところ

われ等のまことを受入れたまへ

君と民 一つこゝろに融け合ひぬ

神の御心をしき

民をしらしめすことは わが使命なり

この和樂を とこしへに結ばんとして

或る日みことはのらせ給ひぬ

菟狹津姫はわが侍臣まへつぎみ

天種子命の妻となるべし

菟狹津彦はみこと畏しみ答へたり

わが國とわがはらからは

御子のものなり

神の御國は 彌榮に榮え

わがやかからもまた 榮えなん

まことこよなき恵みかな

天種子命と菟狹津姫との婚姻は



高天ヶ原と中津國との婚姻にして  
輝かしき新郎と新婦とは  
地上の高天ヶ原さして 船出しけり  
いとも朗かなる 希望をのせて

宗 像 族

青山四周の美地  
關門海峡の東に在れど  
宗像の族住む西の方を  
先づ訪ね見ん

遠賀川の清き流の海に注ぐところ  
青波の巖に碎くる 響灘の岸邊  
孤形の長汀三里



白沙と青松と相映じ

一望千里 豪快極りなりき崗の水門みなと

まばゆき陽 冴ゆる月

その光に照らされたる 雄大なる玄海灘の

波にもまれつゝも毅然たる 大島おほしま 沖島おきのしまは

鬱蒼たる大樹の森を着てこゝに立てり

海を知らず大命うけし

素戔嗚神の 清明をたしかめられたる

天祖 天照大御神は かつて

市杵嶋姫いちきしまひめ 田心姫たごころひめ 多岐姫たきつひめの 三女神を

この地に天降らしめ給ひけり

かくて宗像の地は はやくよりひらけ

高天ヶ原の文化 こゝに花咲く

住民は航海の術にたけ

勇壯剛邁の氣に富む

これわれ等が族うぢの地なり

行きて見んかな

みことは斯くのたまひて

舳を西方に向けらる

宗像の族うぢは天にも昇る心地しぬ

まことにかれ等は天に昇りしなり



高天ヶ原が地にまで降りしなり

われ等 さきに降りしとは云へ

天つ日嗣はわれ等の上にあらず

日嗣の主はたゞ尊の血筋のうちに坐す

日嗣の主の臣として

とこしへにわれ等は仕へん

宗像の族は喜び迎へてかく誓ふ

美はしきかな宗像の地

善きかなや宗像の族

われふるさとに住むこゝちす

ふるさとを中つ國にもがな

みことは斯く詔ひて

このやからの間に一とせを過さる

みことの特によろこばれしことは

みことの御生母玉依姫命が

彼等の族の上より出られしことなり

みことはこゝにて

常世の國についてき

東の方 中つ國についてき

如何にして高天ヶ原を



中つ國に遷し植ゑんかを  
思ひめぐらせ給へり  
御稜威は今や西の國に輝きわたり  
天照大神の御ひかりは全島に光被し  
言向け和す みことの大神こゝに果さる

なかつくに

東の方さして御船は進めり

瀬戸内海の波は靜に

點在する島々は美はし

なごやかなる陽は 海と山とを照らし

月の光は千古新なり

安藝の國によき湊あり



陸路は 北のかた出雲に通じ

海路は 東西をつなぐ要衝なり

ふかき神慮のまにまに

纜はこゝにおろさる

ある日みことは

土を耕せる土人の群を見られて

杜の中に立たせ給ふ

いましは誰ぞ

われはこれ 國神の子なり

國神とは誰ぞ

われ等の祖 素戔嗚神

出雲の國に都して

この國の祖 大國主神を生まれ給へり

よきかな 素戔嗚神は

天祖 天照大神のはらからなれば

汝等もまた われ等の血縁なり

天照大神はいま 朕を遣はして

中國を治らさしめ給ふなり

否とよ こゝは素戔嗚神の御子

大國主神の國にして

安藝都彦はわれ等の主なり



みことの温顔に 微笑は溢れたり

先づこゝに來よ

われ等物語りせむ

みこと、農夫は 肩をならべて 蹲りたり

大國主神は天照大神に

國土を奉られしなり

その國土を 神の國とせんために

御神の慈光を 充ちわたらせんために……

われは今 その御光を携へて來りしなり

畏れ多きかな 多年待ちのぞみたる

その御光を迎い見んとは……

老翁は 安藝都彦のやかたを指して走りゆきぬ

やがて安藝都彦は 家の子等を召し具して

みことの側に馳せ参じ

みことを彼のやかたに 迎へ給へり

たのものしきかな 今 みことを迎へんとは

われ等いまより後

みことのために一身をさゝげまつらん

みことのために安藝都彦は

こゝに多祁理の宮を營まれたり \*1

みことは多祁理の宮にましまして

國民を憐れみ給ひ

御神のめぐみを 施し給ひければ



御稔威はいよ、輝きわたる

蒼人草に みめぐみ垂れ給はん御旨かしこけれど

安藝都彦は云ひけり

ひんがしの國々には

ながき年月 民を養へる國神くにがみいませば

大御わざの恢弘も 容易ならじ

こゝにて先づ 策を煉りまつれ

みことも安藝都彦に同意されぬ

汝がことば ことはりあり

われまさに戦いくさに備ふべし

かくてみことは吉備の國に移りたまひて

\*\*\*

樟の樹をきりて 船をつくられ

幾度か行宮みやもうつされ

忠良なるつはものを 集められ

地理をかながへ はかりごとをめぐらされ

糧食をとゝのへさせたまふ

いくとせか 内海の濱邊に とどまられしは

迎ふべきいくさにそなふるためにして また

このあたりに蟠居せる 出雲系の豪族を

言向けやはさんためなりき

ながき歴史をもてる 豪族等は

遠き祖先の地を 護らんとしにけり



されどみことはいともねんごろにさとされけり

汝等の國土を奪はんためにわれは來らず

われはかへつて 神の國を携へて來れるなり

神の御心をもて 知らさんことこそ

わが唯一の使命にして 國に

義と平和と幸福の光を充ち溢れしめん

みことは斯く 言向け和されたり

人々はそのみことばを 信じたり

まことの心は 人々にわき

恩愛の情は みことの御胸に溢れたり

高島の宮を 舟出するときには

つはものは舟に充ち

舟は舳艫相つき

御むね畏む つはものゝ勇氣は

天をもつんざくばかりにて

如何なる障碍も既に 突破されけり

數多きつはものを乗せたる

數多き軍船は

大御船を中心に舳艫つらなり

波靜なる瀬戸内海は

時ならぬ威風の前に驚きおそれぬ

明眉なる風光は



神威によりて いよよ明<sup>あき</sup>らけく

生氣とみに加はりて

太陽<sup>ひ</sup>も凄蒼<sup>ひ</sup>なる 光を放ちぬ

播摩灘は鏡のごとく

明石海峡も皇師<sup>みくさ</sup>のために 途をひらきぬ

浪速潟に波は逆捲<sup>さかま</sup>けども

そはたゞ志氣を鼓舞せんためなりき

註1 多祁理宮 古事記には多祁理宮とあるが、日本書紀には埃の宮とある。埃の宮は恐らく峻<sup>たけ</sup>の宮にて埃の宮と誤り寫されたものであらう。福山志料には「藝備古跡志に安藝國埃宮と云は、天皇暫く御座せし處にて今その社は即ち天皇を祭り奉る。延喜式に多家神社と云これ也。多家宮とは上古質撲竹をもつて宮を作りしなり、埃宮も行宮なれば假に竹にて作れるを、後に竹の神社と云。多家は竹の和訓なり。」とある。

註2 吉備の高島宮 日本書紀には三年間御駐蹕あつたとあり、古事記に八年ましまししとあるが、果して何處であるかについては、今なほ定説がない。傳説に残つてゐる高島宮は五ヶ所ある。

1、廣島縣沼隈郡田尻村田島  
 2、岡山縣小田郡神島村高島  
 3、岡山縣兒島郡甲浦村宮浦  
 4、岡山市外高島  
 5、岡山縣上清郡高島村祇園



大和を指して

目ざす大和は指呼の間にあり

流れをさかのぼれば 青雲のたなびくあたり

孔舎衛むらの白肩津なり

皇師はこゝよりぞ 陸に上らせ給ふ

\*1

生駒山脈は南北にわたり

大和盆地はその東方にあり

皇軍は兵をとゝのへ龍田口さして進まれたれど

みち嶮しくして 戦ひ利あらず

遣りて生駒山を 踏えんとすれば

長髓彦の大軍 こゝを阻む

長髓彦は出雲系の豪族にして

皇軍の來るを 恐れたり

長髓彦おもひけらく

天神の御子 こゝに來るは

わが國土を 奪はんためなり

われ身をもつてこれを阻むべし

長髓彦は 出雲族の長にして

このあたりを うしはくもの



土人はみな  
彼をおそれ 彼に従ふ

その勢は大にして

その兵は強し

孔舍衛坂の戦ひは猛烈にして

皇兄五瀬命いっせのみこと 流矢にあたる

遠慮深謀の みことは 詔はれたり

この坂を 突破するは難し

徒につはものを 失ふべからず

兵をかへすに如かずと

註一 青雲の白眉津は今の大阪府河内郡孔舍衛村大字日下の邊より、隣村の盾津村大字加納の志加多一帯にかけての低地で、日下は草香、志加多は白眉の訛つたものと云はれてゐる。



日を負ひて進ませ給ふ

日の御子の軍が 東に進むは

日を敵として進むことなり

われ等 日を敵として進むべからず

日の勢ひを背に負ひて 進むべきなり

そのときこそ 御神の勢威は われ等のもの

われ等自ら戦ふにあらず

御神われ等に在りて戦へば

刃に血ぬらすして 仇ども服すべし

軍を孔舍術に かへしまつり

楯を立て、 みことは宣べられき

こゝは國境なり これよりうちに

長隨彦の軍 入るべからずと

もとより皇軍の勢威に恐れたる

長隨彦の軍は この楯よりうちに入らず

みことの軍は悠々と

大海の邊にひきかへしけり

さあれ五瀬命の無念ぞ しのぼるゝ



うれたきかな いやしき奴の傷手おひ

未だ報いずして果てんとは

命はかく 雄たけびしたまふ

その雄たけびは

天にとどろき地をふるはし

雄の水門の 波もさかまき

涙は濱の巖に 白浪と碎けぬ

命の傷手は深く

船のうちにて神さりませば

竈山に 御船をとどめさせ給ひ

なきがらを こゝにおさめさせ給ふ

涙ながらに日の御子は詔ひぬ

わがいろせの君 こゝろ安けれ

君神去りますとも朕はあり

報ゆるは天神なり

願はくは君

地下よりたすけ給へ

われ等み神と偕に在り

御神かならず 勝ち給ふべし



紀伊の國

二九〇

出雲族との往來しけき 紀伊の國には  
出雲族の部下多し

名草戸畔もその一人なれば

名草戸畔を誅して

海路 みなみを指してぞ 出で立ち給ふ

和歌の浦は波 靜なれど

日の岬ははや 波高し

さはれ此の海岸の明朗さよ

山は海にせまり

海の水は綠濃し

船泊りせる島の名は何ぞ

日の御子を迎へたれば 神島かしまとよばれ

稻積島いなづまにては 食糧を積みけり

潮の岬は 波高けれど

橋杭の奇巖に大古を偲び

大島の翠巒は 南の海を思ふによし

波靜なる勝浦に下船すれば

眞白なる那智の飛瀑は 樹間にかゝれり

二九一



まこと此の紀伊の靈域は  
日の御子を迎ふるに適へり

軍を佐野に駐めさせ給へば

神邑は目前に在り

神邑のほとり

熊野川の 海に注ぐところに

天磐盾あり

西の方 連山の盡くるところ

突兀たる巖壁をなす山なり

みこと こゝに登り給ひて 國見さるれば

熊野川の清流は 溶々として流れ

熊野灘は 渺々として天に連る

さながら そは

あやに長き みことの御胸を映すに似たり

このとき 神邑に住む高倉下は

饒速日命の御子となへらるゝ高倉下は

或る夜 靈夢を見たり

その夢

光華うるはしき 天照大御神が

恭しく御前に立つ 武甕槌命に詔へり

わが皇孫は中國に在れど

中國はなほ 騷然たり

爾ゆきて 皇孫をたすけよ



みこと畏し されど

御神の御威を負ひ給へる皇子は強し  
年老へるわれの行くまでもなからん  
かつて大國主命を言向け和したる

師靈を行かしめよ

さなり 師靈を遣はせ

師靈は わがみたまの劔なれば

行くところ敵なかるべし

かくて武甕槌命は 高倉下に曰へり

師靈は爾が庫の中に在り

目ざめたる高倉下は

恐るゝ庫の中をのぞけば

けに師靈は床の上に衝き差されてぞ立つ

狂喜せる高倉下は 畏みおそれ

師靈を みことのみ前にさゝけまつれば

みことの元氣は いよよまし

つはものどもの士氣は 百倍す

みこともやがて

太神がみことに詔らせ給ふを 夢見たり

行く手は峻しく

山中に悪獸はびこれば



わが遺さん 頭八咫鳥を導者とせよと

目さむれば頭八咫鳥

み空より翔び降りてみ前に齋き

おそれ多けれど 導きまつらんと云ふ

喜び勇み みことは詔らせ給ふ

よき祥なるかも

爾の來ること 夢にかなへり

皇祖 天照大御神

あまつひつぎの業を 助けたまふ

赫なるかな わが事なれり

日 臣 命を督將となし

大來國の元 我どもを帥る

まつろひ來る沿道の民を合はせ

堂々と天地を呑んで

大和をさしてぞ出で立ち給ふ

原始林の間道を縫ひ

天に聳ゆる高山を攀ぢ

急流の溪川を涉り

八咫鳥の向ふまにまに

今ははや 目ざす地 やまとなり



大 和 入

大臺ヶ原山の雄姿 おほぞらに高く

裾野は廣き高原地帯

兄あとうかし、弟おとうかしの住む

宇陀うだの下縣しもつゑかたにぞ着かせ給ふ

このあたりの民をうしはくは 兄あとうかしと弟おとうかしなり

先づこの二人を言向け和さんと

歸順御勸告の軍使として

頭八咫鳥を遣はし給ふ

道しるべせる頭八咫鳥は今

そのいさほしをめでられて

道臣命の名を賜はりてあり

軍使の威風堂々たり

兄あとうかしおそれをなして

鳴鏑めいせきをもて射返へしたれど

訶史羅前かぶらさきに鏑は落ちて

道臣命は傷つかず

兄あとうかし 軍勢を聚めんとすれば

日の御子の み光りを仰ぐ民は



兄滑の旗下に集まらず  
 詮方なく兄滑は  
 まつらふごとく装ひて  
 みことに隙を與へんとし  
 大殿をしつらへて みことを招じ  
 押機をもて弑ひしまつらんとす

弟滑はされど

御稜威かしこみ

みことのもとに参ひ來り

兄滑の奸計を告げたれば

道臣命 久米命は兄滑を召し

爾 如何にして大御子を饗するや

おのれの先づ大殿に入れ と  
 劍を抜き 槍さしつけて  
 兄滑をその大殿に追入れければ  
 兄滑は おのが張りおける  
 押機に打たれて 息たえぬ

弟滑の忠誠を愛でられ

弟滑の大饗を受けさせ給へる みことは

つはものどもを一堂にあつめて

幸さきの祝賀の宴をぞ開かれたる

御宴なかばに大來目部は

劉朗と 御製を歌ひけり \*1



宇陀の南城に 鳴網張る

我が待つや 嶋は障らす

いすくはし くら障る

前妻が 魚乞はさば

立楓稜の實の無けくを

こきしひゑね

後妻が 魚乞はさば

いちさかき實の 多けくな

こきだひゑね

歌ひ終ればもろともに

いともほがらかにはやしけり

ええ しゃこしや \*2

こはいごのふぞ \*3

あゝ しゃこしや

こはあざわらふぞ

宇陀に基地を得られたる みことは

輕兵を率ゐて吉野地方を巡幸まし

磐を押しわけて迎へるもの

梁をつくりて漁するもの

その他おほくものを言向和し給ふ

宇陀に屯したまふ間に

高倉山より國見し給へば

國見岳の上に八十梟帥ありて

女軍を女坂にくばり



男軍を男坂にくばり  
 炭火を墨坂におこして  
 もの／＼しく備へせり  
 兄磯城の軍勢もまた 磐余邑いはれのむらに充ち充てり  
 そのさまを見られて奮ひ立ち  
 皇祖の神に祈らせ給へば  
 靈夢また現はれ給ふ

むべ、ひたすらに 天神地祇を祭れ  
 天香山あまのかみやまの土を取りて 天平瓮あいのひらかをつくり  
 ひたすらに御神を祭れ  
 神は勝つ 神ぞ勝つ

この夢はたして 皇祖の神の御心なりや否やは

天香山あまのかみやまの土を得るや否やにかゝると みことと思ほし  
 椎根津彦しひねつひこに 卑いやしきおきなすかたの貌すがたさせ  
 弟滑かたなに卑いやしき老嫗おきなの貌すがたさせ  
 天の香山につかはせば  
 道をふさげる群虜あやど 二人を見て  
 あな醜みにくきかな老父老嫗おきな と  
 二人のために道をさけたり

天香山の土をとりて歸れば  
 みこと いたく喜ばせたまひ  
 まことにこれ 天神あまつみかみの御心みこころなりと  
 この土をもて八十平瓮をつくり  
 丹生たにぶの川上に天神地祇を まつり給ひ



いとも敬虔おごそかに

天業の達成を 祈らせ給ふ

わが榮えのためにあらず

み神の 大御心をひろめんためなり

われ 必ず勝たんと

神風の

伊勢の海の

大石にや

いはひ纏へる

細螺しよらの \*4

細螺の

吾子よ 吾子よ

細螺の いはひ纏へり  
打ちてしやまむ  
打ちてしやまむ  
かく、歌はれて

八十梟帥を國見岳に敗り給ふ

さはれ八十梟帥の餘黨 なほ未だ目さめず

心よりまつろはぬものありければ

忍坂おさかに大室おほむろつくらせ

虜あかどもを宴饗よめあひりに招かせ給ふ

さかもりに虜どもの酔ひしれしとき

虜どもを斬りてしやまむと 謀はかりせたまひ

宴たけなはにして道臣命に歌はせ給へり



忍坂の 大室屋に

人多に 入り居りとも

才々し 來目の子等が

頭槌 石槌 もち

打ちてしまむ

劍もてる八十膳夫は一齊に立ちて

群虜を 一人のこらす斬りて殺しぬ

凱歌は齊唱されたり

今はよ

今はよ

あゝ 醜可笑

今だによ 吾子よ

今だにも 吾子よ

また

蝦夷を一人

百人

人は言へども

手向ひもせず

みことは されど

かばかりの勝戦に心ゆるめず

勝ちて兜の緒をしめよ

大いなる賊はすでに 滅べども

ちらばりたる小き賊は なほ多し

止まりて反撃を待たんより

すゝんで敵を屠らん と



營を他所に移させ給ふ

みことかしくみ 八咫鳥はまた

磐余の館に兄磯城を訪ひ

天神の御子 いましを召す

いさわいさわ

いさわいさわ と鳴けば

兄磯城は怒りて

何ぞ此の鳥の鳴く音わろきや

天壓神の至りますとき

わがねたみつゝあるときにと

弓ひきて 八咫鳥を追へり

八咫鳥また 弟磯城を訪ひ

天神の御子 いましを召す

いさわいさわ

いさわいさわ と鳴けば

弟磯城は畏みおそれ

喜しきかもや 汝の來るは

天壓神の至りますとき

吾がまつらふ心の そなへなれりと

八枚の木の葉の皿に 食を盛り

八咫鳥をねぎらへり

みことのまにまに

弟磯城は來りて告したり

わが兄 兄磯城



天神の御子 来りますとき  
もろくの兵どもを集めたり

夙くこれを討ち給へ

將兵どもは御前に集まりて

参謀會議はひらかれたり

先づ弟磯城をして さとさしめ給へ

その後 兵を擧げんも遅からじ

斯く云ふ將たちの 言葉により

弟磯城をしてさとさしめしかども

頑固なる兄磯城のこゝろは とけず

愚なる はむかひは つゞけられたり

そのとき 椎根津彦 はかりて曰ふ

先づ女軍を遣はずべし

女軍 忍坂より到らば

賊 大軍をもつてこれを防ぐべし

その隙に

われ つよき兵卒をもて墨坂にせまらば

一擧にして敵を屠ふらん

みこと 椎根津彦の謀をいれ

そのごとく 兄磯城を攻めたれど

潰ゆる味方の數多し

このとき みことは

兵士に御製を賜ひけり

楯並めて 伊那佐の山の



木間このま従ゆも 行き守らひ \*6

戦へば 吾はや飢ぬ

島津しまづ鳥とり 鶉飼うずケ徒ども

今助すけけに來こね

志氣はとみに奮ふるひ

梟帥ひどのこのかみ 兄磯城等は斬られけり

つぎくにあだどもは打たれけり

されどなほ いたもつよき

いとも憎むべき

長髓彦は のこりてあり

才みづ々し 久米の子等が \*7

粟生あはぶには

菲かひろ 一本 其根がもと

其根芽そのねめつな繁つなぎて

撃ちてし止まむ

才々し久米の子等が

垣下かきもとに 植うゑしはじかみ

口疼くちひく 吾は忘れじ

撃ちてし止まむ

あゝ 五瀬命を

神去らしめしはじかみに

日の國の粟生あはぶをこなふ菲かひろめに

神の怒りの強きかな



その害惡を 吾は忘れじと  
憤ります日ひの御子みこは  
打たすば止まずと 詔みことらせ給へば  
日ひの御子みこと一つとなりし大御心おほみこころは  
嚴いそをもとほす矢やのごとく  
長隨彦ながずとひこの軍營いくさ目がけて すゝみけり

長隨彦ながずとひこの軍勢いくさはつよく  
沛然ひさかたとして氷雨ひこめさへ降り出で  
天地あつちたちまち晦くろければ  
皇軍みいくさ またも阻とどまれしとき  
見よ みことの 執とらせ給ふ 御弓みゆみの弾たまより  
燦爛さんらんたる金色きんいろの光ひかりかゞやき

流るゝ電いなづまのごとく  
長隨彦ながずとひこの將兵しやうへいの眼まなこを射やたり  
黄金色がねいろの鴉とび 御弓みゆみに止とまりしが故ゆゑなり  
長隨彦ながずとひこの軍いくさどもは  
目めくらみて退ひきはじめたり

不利ふりと見て長隨彦ながずとひこは  
使者つかひを遣つかはして云いはしめたり  
かつて天神あまのふみの御子みこ 饒速日命ニハハヒノミコト  
天磐船あまのいわたぶねに乗りて天あまより降くだれば  
われ等 命いのちを迎むかへて君きみとなし  
わが妹いもうと 三炊屋媛みかぢやひめをたてまつり  
可美眞手命かみまてのみこと 生あれませり



天神の御子に 兩種まさむや

みことの來れるはたゞ

われ等のくにを奪はむためと われは思ふ

みこと答へて詔らせ給ふ

天神の御子多に在り

いましの君もし

まこと天神の御子ならば

かならずその みしるしあらん

そをわれに見せよ

饒速日命の 天羽羽矢と歩鞞とは

みことの御前にたてまつられたり

みこと見をなはして そのまことなるを知り

みことの 天羽羽矢と歩鞞とを

長髓彦に示させ給ふ

長髓彦もそのまことなるを知りたれど

あゝ 宿命の子 長髓彦は

すでに兵備とゝのへ

弓に手をふれて居るときなれば

その勢をとどめ得ざりき

饒速日命はされど

日の神の御稜威を知れり

大義は親を滅す

命は遂にわが妹の夫

長髓彦を殺してぞ歸順へる



元兇はすでに屠られたれば  
 諸他の小賊はみな亡ぼされたり  
 あゝ終に 天業は成れり  
 天の下は安定められたり  
 平和の光 天の下にあまねく  
 青山は四方にめぐり  
 天つ日の光 さやけきかな

御 即 位

天香山の 墳土とりて 八十瓮つくり  
 長くも 御自ら齋戒して  
 神をまつり給ひし 日嗣の主の詔は  
 凜として天の下に下されたり

われ東をさして來りしより  
 年を経るすでに多なり  
 天の神の威 わが上に在り



まつろはぬもの皆亡ぼされたり、  
餘賊のこりのみせなほ邊陲へんすうの地にあれど

中州の地に異心なし

よろしく今 皇都みやこきづかん

今やなほ 時わか

民の心すなほなり

われ今 制のりを立つ

わが制のりは天地あめつちを統すぶる制のり

わが業わざは民に利くちを興たふなり

この御業を行はんため

われ今 大宮おほみやをつくりて

寶位たかみくらに即かん

この神國みくにを賜たまひし 天神あめのみことの 徳みちに答へ

皇孫すうみまの正を養ひたまひし 傳統でんじょうに従はんためなり

六合くわくはこれ都

八紘あふのしたはこれ神聖なる一家

あゝ壯さかんなるかなこの皇都みやこ

あゝ美はしきかな此の一家

畝傍山あしながやまの東南に樞原の地あり

蓋しこれ國の中か

われこゝに都つくらん

樞原に都なりければ

みことはこゝに即位し給ひ

みことは今や 日嗣ひつぎの主となり給ふ

現神あらみかみ、すめらみことの



尊き御姿は今

たかみくらに在し給へり

くもりなき御空に朝日の照ることく

神國日本の 黎明は來にけり

肇國のいしずるゆるぎなく

すめらみことの御代 かぎりなく

すめらみくには いやさかなり

(終り)

註1 この御製を明確に解釋したものが殆どない。今大意を述べると、宇陀の高城に鳴を捕る鳴繩を張つ

て待つてゐると鳴のやうな小さな鳥でなく鯨がひつゝかた。この鯨を 前妻には少しゝかやらぬが 後妻が魚を乞ふなら澤山與へよう、であると信ずる。

註2 しやこしや しやはしやつ面のごとく嘲るときに用ゆる言葉。こしやはをこしや、をかしやなり。

註3 はつきりわからぬ。

註4 八十梟帥を石に纏へる細螺にたとへてゐる。

註5 みつゝし 満々しなり。充ち足らふ意。こゝでは久米の枕言。

註6 木の間従も 木の間より。食糧に乏しいが、鳥の鳥糞を飼つて居る人が、食糧をもつて助けに來る からしつかりやれとの意。

註7 粟をつくつて居る立派な畑に、葦や藁が生へて邪魔をするやうに、長髓彦が邪魔をするから、その 徒を一まとめに打ちとらうとの意味。



## あとがき

やうやく印刷の段取となつた。

「こんな本は、大きな立派な出版屋に出させた方がいゝではないか。大きな出版屋なら、宣傳もしてくれるし、廣告もしてくれる。第一本の賣れ方が違ふよ」と云つてくれる友人がある——事實或る大きな出版屋が出したとも云つた。しかし私は、何うしてもこれを、自分で出版したかつた。

私は出版屋をやつて居るが、それは決して商賣のためにはじめたのではない。私はたゞ、出版を通うして御奉公をしたかつたのである。御奉公をするために何故出版を撰んだかと云ふと、今迄の生活や經驗上、私にはこれが一等適當だと考へたからである。

何は兎もあれ、世の中にこの本を贈れるやうになつた今、私はたゞ嬉しい。愈々印刷に附する事が出来るやうになつた今朝、私は三時に目をさました。(四時には牛乳を配達するのである)そしてこの本について色々のことを考へたが、あゝもすればよかつた、斯うもすればよかつたと思ふことで一つばいである。それ等はしかし、今となつては遅い。重版のときまで待つことにする。

作者としての感想から云つても、暗誦の出来る位、また、歌として何處でも歌へる位、口調のいいも

のにしたかつたが、はじめから完全なもの出来ないだらう。これの實現は他日を期する事としよう。今としては私は寧ろ、一通り日本の古典を讀んだだけではわからなかつたことが、何人にもわかるやうに綴れたことを満足に思つてゐる。

私は決して、日本の神話を、改變してゐない。しかしまた、日本の神話を、最も精確に解釋する事を努めて來た。その結果、從來の一般的解釋に従ひ得ないところも一二なくはなかつた。が、これは寧ろ、日本信仰の深化となつたと思つてゐる。

神話である關係上、古代日本の言葉をそのまま用ひたところがある。けれど、それでは何うしてもわからぬ部分は、現代語にした。その結果、これはもはや、何人にもわかる神話となつたと思ふ。

日本神話は世界に類のない高い香氣をもつたものであり、深みをもつたものである。序詩でたゞへておいたやうに、それはまた、永遠に日本の生命であり力である。

「なかつくに」を作し「なかつくに」を出版した理由は、この無類の日本神話を、全日本人の靈の奥底にまで泌み通らせたいからにほかならない。

昭和十七年九月五日

著者識す



龍宿山房發行圖書

# 日本信仰協會機關誌

「日本信仰」「天皇信仰」「み前に齋く」「八紘一字史の發足」今また「なかつくに」等を贈つて、日本固有の、日本傳統の、日本信仰を宣揚しつゝある著者は、多くの同志を糾合して日本信仰協會を設立して居る。本誌はその機關誌である。

月刊

# 日本信仰

毎月一日發行  
定價 二十錢  
一年 二圓四十錢

「日本信仰」は日本國體や日本精神の常識的解説ではなく、日本の古典的精神を正解せしむると共に、現代的知識を満足せしむるものである。而も決して單なる研究的學術雜誌ではなく、よく、現代の世界的動向や國內的情勢を明にし、日本及び日本人に對してその行くべきところを明示するものである。本書の讀者はまた本誌の讀者にして日本信仰協會の會員たらん事を望んで止まない。

昭和十七年十月二十日  
昭和十七年十月三十日

印刷 (四〇〇〇部)  
發行

定價金 二圓五十錢

なかつくに

會員番號 一四〇〇二六番

(出文協承認)  
あ 150168

版權  
所有

著作兼  
發行者

加藤 一夫

印刷所

東京市神田區鎌倉町十九番地  
明治印刷株式會社

印刷者 (東東三六)

井 關 敦 雄

發行所

川崎市上丸子七三三番地  
龍宿山房

配給元

東京市神田區淡路町二丁目九  
日本出版配給株式會社



龍宿山房發行圖書

# 天皇信仰

加藤一夫著

定價一圓五十錢  
送料 十一錢

海軍特別攻撃隊の九勇士を始めとして、爆撃に向ふ飛行隊士や、地雷火の中に身を投じて皇軍のために突撃路を開いた勇士等、大東亞戰爭開始以來、涙なくして讀み得ない幾多の報導を我等は持つ。前途多望の青年將校や兵卒をして、己を棄て、敢然死に行かした此の力は何であるか。他なしそれはただ、日本人のみが持つ 天皇信仰の賜物である。

現神 天皇に一切をさぐることによつて、生命を完ふする。これ、日本人の宗教である。日本人が傳統的に持つ此の信仰を、解説し、最も妥當なる理論的根據を與へたのが本書である。

その本書は今回、獨逸人及び伊太利人によつて翻譯さる事となつた。日本は何故に斯くも強いかを知り度がつて居る友邦獨逸や伊太利に此の書を送り得るは著者の無上の満足である。願はくは友邦相携へて世紀的な天業を達成せよ。特に日本人よ、何ものにも優る此の信仰、此の力を活かせ!!! これ著者が衷心よりの祈りである。

龍宿山房發行圖書

新刊

# 史前文化史

加藤一夫著

定價 二圓三十錢  
送料 二十錢

人類は何時から生れてゐるのであらうか。天體や地球は如何にして形成されたのであらうか。これを知るだけでも大なる興味である。

われわれの持つて居る歴史はせいゝ六七千年前からのことである。それ以前の數十萬年或は百萬年のことは、文字をもつて書き記るされて居ない。然らばわれわれは遂に、歴史以前の歴史を知ることが出来ないのであらうか。

學者はこれを知るために苦心した。そしてそれは遂に酬ひられた。本書はその學者の成果を要約して、人類の史前文化と生活とを、歴史的に記述したものである。まさにこれ、日本空前の試みである。新しい知識を與へると共に、興味は津々。



龍宿山房發行圖書

新刊

# み前に齋く

加藤一夫著

定價 一圓八十錢  
送料 十二號

—懺悔自傳—

著者は思想の巡禮者である。生活の根柢を掴まうとした著者は、或時は基督教に行き、或る時はトルストイに傾倒し、或時は佛教に傾き、或時はアナアキズムを指導した、と雖も、遂にその安住の地を得なかつた。

而も飽くまでも眞理を探求して止まなかつた著者の努力は決して無駄ではなかつた。著者は遂に魂の故郷を見出した。著者は日本人に還つたのである。

著者の此の苦闘記が本書である。それはすべて血をもつて書かれた生活であると共に、血をもつて書かれた告白である。著者は歌つて曰く

いまはたゞ みことかしこみ 大君の へにこそ死なめと われは出で立つ

龍宿山房發行圖書

近刊

# 黒住宗忠傳

延原大川著

定價 二圓五十錢  
送料 二十錢

軍事や政治や經濟は現實の生きた力である。しかしその根柢に、これに方向を與へる宗教の存することを忘れてはならぬ。近時、再びまた、宗教の重要性を知りはじめたのは喜ぶべきである。

宗教はしかし漠然たる人類教であつてはならぬ。人類教は世界何れの國にも通用するが、國民を指導する眞の力とはならぬ。

茲に、飽くまでも日本に即し、日本信仰を把握し、日本に眞の方向を與ふると共に、全人類を指導する眞の宗教家がある。

黒住宗忠がそれである。

釋迦やキリストやマホメットのみが宗教家ではない。それよりも更に優れたる宗教家が日本に在る。日本人よ、日本を忘れてはならぬ。日本の偉大なる魂を忘れてはならぬ。著者は多年黒住宗忠を研究せる者、著者によつて黒住宗忠の眞價は發揚された。蓋し目下必讀の書である。



龍宿山房發行圖書

加藤一夫著

——大東亞建設譜——

新刊

# 八紘一宇史の發足

時局叢書第一篇

定價 一圓三十錢  
送料 十二錢

大東亞建設は日本肇國の第二段階である。神國擴大、神意恢弘の、飛躍的天業である。

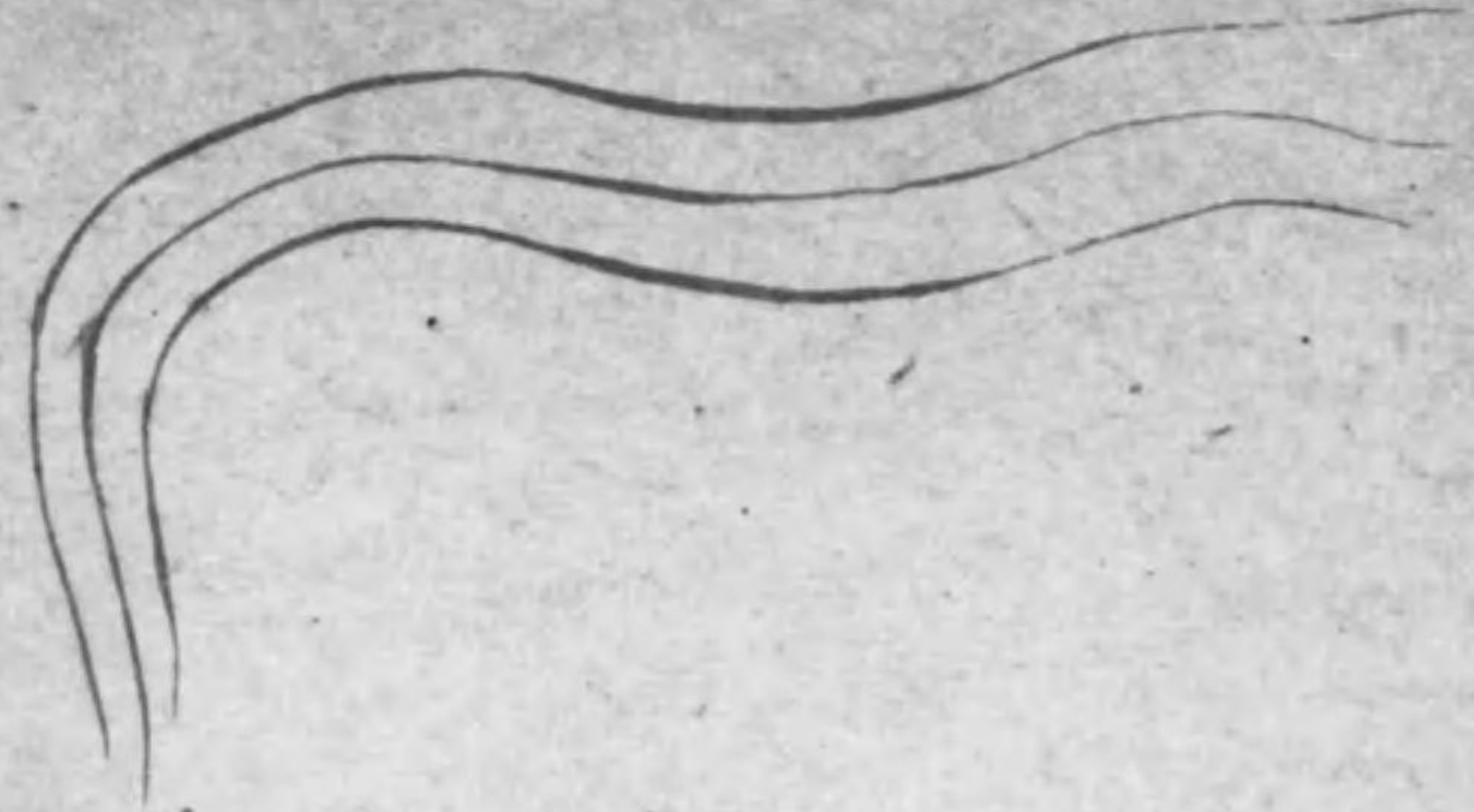
大東亞戦争はそのための聖業であつて、今や、神武天皇の大理想たる八紘一宇の時代に入らうとしてゐる。即ち大東亞戦争によつて世界歴史は今、この八紘一宇史の時代たらんとしてゐる。

第二の日本肇國は第一の日本肇國精神の繼承である。著者の望むところは、日本が今、(その軍人たると、官吏たると、經濟人たると、文化人たると、一般民衆たるとを問はず)日本肇國精神の何たるかを確認されん事である。

本書はそれを明にしたものであつて、歐羅巴の東亞侵略や、東亞の現状を説き、且つ、大東亞を如何に經營すべきかを語つたものである。まさに、時局指導の最尖端を行くものである。



957  
13





終

